九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

韓国考古学の新世紀 ： シンポジウム総括

西谷, 正
九州大学大学院人文科学研究院 ： 教授

https://doi.org/10.15017/2198494

出版情報：韓国研究センター年報. 2, pp.41-43, 2002-03-15. 九州大学韓国研究センター
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

韓国考古学の新世紀－シンポジウム総括－

西谷　正（九州大学大学院人文科学研究院教授）

韓半島の考古学で最大の問題は、何といっても南北分断に伴う南北間での調査・研究の不均衡な発展である。一日も早い南北相互間の学術交流の進展と、南北の平和的統一にもとづく、統一的な学術研究の展開を祈られずにはおれない。その意味でも、2000年11月24日に東京で開催された古代史シンポジウムでは、南北の学者が一堂に会し、また、日本の研究者も加わって、最新の調査と研究の成果を共有できたことの意義は大きい。出席者一同は互いに、韓国古代史と日韓交流史に関する共通認識を深めようと模索したが、20世紀最後の年を飾るにふさわしい画期的なものであった。私たちは、ここで芽生えた学術交流の芽を21世紀の早い時期に大きく育て上げる努力をしなければならない。

一方、日本と北韓の間では、学術交流の細いパイプが幾条か通っている。とりわけ大正大学と社会科学院考古学研究所による霊通寺跡の共同発掘調査は重要である。そのような共同調査を継続することもこんごの課題である。

解放後に達成された韓国考古学の研究成果には、各時代にわたって目を見はるべきものが数多く認められる。その中でもまず第一に上げるべきものは、旧石器時代文化の解明であろう。すなわち、旧石器時代の遺跡が韓半島全域に広く分布するとともに、前・後期と全期間にまたがることが明らかにされた。また、北部では哺乳動物や人類の良好な化石資料が比較的多く蓄積されている。とくに、北部のピョンヤン特別市祥原郡において、前期の北京原人と比較しうる化石人骨が見つかり、龍谷人と名づけられた。南部の忠清北道丹陽郡のスヤンゲ遺跡でまとまって出土した剥片尖頭器は、九州の後期旧石器と共通する点でも注目を引いている。旧石器時代の東北アジアでは、環境変動とそれに伴う生物群の移動、そして、大陸棚や対馬海峡の陸橋、石材ことに黒曜石の交易など、関係諸国間で共通する課題が山積みしている。そのような諸問題の解決のため、地理的に中央に位置する韓国が先導的役割を果たされることを期待してやまない。

同じようなことは、新石器時代についても当てはまる。後氷期に入って、現状に見るような東北アジアの海岸地形が形成され、中国・ロシア・韓国・日本でそれぞれ独自の土器文化が出現した。たとえば、隆起（線）文土器や黒曜石の問題は共通の議論の対象となろう。それはともかくとして、韓国の新石器時代では、東部の江原道で良好な集落遺跡の調査が相次いで行われた。襄陽郡の鰲山里遺跡は前期の標準遺跡として、また、地境里遺跡は中期の西部地方との関係を考える上で、それぞれ重要である。西部では京畿道の江華・金浦両郡で、約4000年前の稲資料が見つかったが、東アジア諸地域における稲の起源に係わる問題提起となる。ところで、新石器時代の開始年代が、現在のところ中国や日本ほど古くないので、旧石器時代の終末から新石器時代の開始に至る過渡期の様相解明が待たれる。それに加えて、新石器時代における生活基盤の中で、植物性食物の採集活動や原始農耕の占める比率についても知りたいところである。

韓半島において、青銅器時代文化とりわけ独自の青銅器の実態解明が大きく前進したことは、前世紀でも大きな成果の一つに数えられる。南部の慶尚南道晋州市の漁隠1地区遺跡は、竪穴式住居群からなる集落が、畑や墓地（箱式石棺墓）とともに調査された稀有な例であるが、その後も生産域の調査例は増加しつつある。西南部の忠清南道保寧市の寛倉里や全羅北道益山市の永登洞などで発見された方形周溝墓は、青銅器時代の新たな墳墓形式を追加するとともに、日本の弥生時代の方形周溝墓との関係が問題となる。弥生時代の山陰地方を中心に特異な発達を遂げる四隅突出型墳丘墓との関連で、北部の慈江道楚山郡の蓮舞里2号積石塚が

話題を呼んだ。それはともかくとしても、青銅器時代の墓制は後の古墳文化の基盤を形成するものとして、地域性を踏まえた総合的な検討が望まれる。

紀元前後のころの数世紀間は、古朝鮮・三韓とか原三国の時代などと呼ばれる。ピョンヤン特別市の統一街で発掘された楽浪郡関連の大量の遺物は、南部の慶尚南道義昌郡の茶戸里木棺墓の出土品と比較すると興味深い。茶戸里木棺墓からは、弥生文化の中広形銅矛が出土している。そこで、茶戸里木棺墓を媒介として、楽浪・韓・倭のそれぞれの独自性と共通点から、その背後にある諸地域間関係の歴史を読みとらなければならない。一方、一説に帯方郡の郡衙跡ともされる、ソウル特別市の風納土城内部や土塁の発掘調査が進展した結果、馬韓や百済初期の竪穴式住居跡・祭祀遺構などが検出されているとともに、中国南朝の陶磁器なども出土して注目される。風納土城は、帯方郡・馬韓・建国期の百済・百済と南朝の関係などの諸問題を解明する上できわめて重要な遺跡であって、こんごのさらなる調査の進展が期待される。

三国時代に入ると、京畿道九里市の嵯峨山で発掘された、高句麗の堡塁遺構と出土遺物は、高句麗による百済初期の漢江流域への進出過程を明らかにする上で特筆に値する。最近、中国吉林省集安市にある山城子山城の内部で建物遺構群が発掘され、多量の遺物が出土しているが、中国東北地方から韓半島中部にまたがる高句麗遺跡・遺物に対する一貫した統一的研究が望まれる。その意味で、ソウル特別市の社会法人高句麗研究会による研究実績は高く評価されるとともに、さらなる発展を期待したい。

百済では、西南部の全羅南道扶安郡の竹幕洞で祭祀遺跡が調査され、中国南朝や倭との対外交流史の研究に重要な成果をもたらした。同じく西南部の全羅南道に集中分布する前方後円墳も、5～6世紀の百済と倭の密接な関係を示唆する。そこで、百済と倭との交流史に対する研究の深化が期待されるところである。百済後期に当たる忠清南道扶余郡の陵山里廃寺は、高句麗の東明王陵付属の定陵寺とともに、王陵付属の陵寺として、金銅製大型香炉・昌王13年（567）銘舎利龕の出土と合わせて注目される。陵寺の変容形式は、聖徳太子磯長墓と叡福寺に認めることができる。ここにおいて、高句麗・百済・飛鳥仏教の諸関係が改めて問題になるわけである。

新羅では、慶尚北道慶州市の隍城洞遺跡が、国都における本格的な製鉄遺構として重要である。地方でも、慶尚南道密陽市の沙村遺跡において、製鉄関連の遺構や遺物が調査され、新羅の鉄生産の解明に資するところが大きい。それとともに、燃料用木炭の横口式炭窯の調査例も増えている。比較的に調査が進んできた土器・鉄・鉄器ばかりでなく、塩・穀物などの生産関係遺跡や、住居・集落の遺跡の調査が遅れている現状は認めねばならない。

加耶諸国の遺跡群に関する調査も盛んであるが、たとえば慶尚南道金海市の良洞里や大成洞の墳墓群の調査成果は、弁韓狗邪国から金官加耶国への形成過程を物語ってくれる。そして、同じく咸安郡の城山山城で出土した木簡は、それ自体きわめて稀有なものであるが、阿羅加耶国の新羅への政治的従属化の様相を具体的に示すものとして重要である。

三国時代以後の考古学研究においては、木簡とともに金石文など文字資料を合わせた学際研究の必要性を痛感する。

いわゆる統一新羅時代では、慶州市内の皇龍寺跡東南外区など数個所で道路遺構の一部が検出され、新羅王京の復元に役立つ。また、同じく龍江洞では苑池遺構が発掘され、『三国史記』所載の景徳王19年（760）に見える別宮との関連性が議論されるようになった。日本では、藤原京や平城京における都城制関連の道路遺構や苑池遺構の調査は、引き続いて進行中であるが、このような日韓における成果は、考古学から見た新羅と日本の交流史に新たな視点を提供するであろう。

渤海時代の南京南海府に対して、咸鏡南道北青郡の青海土城が比定され、周辺の山城群と合わせて注目される。

同じく新浦市の梧梅里の廃寺跡、咸鏡北道清津市の富居里の古墳群、そして同金策市の24個石など、東北部における渤海遺跡群の調査は、渤海研究の空白部分

を埋める大きな成果といえる。渤海関連の遺跡は、ロシア沿海州のクラスキノ土城や、日本の金沢市の畝田寺中遺跡などでも調査されている。ただ、渤海国の形成過程や性格について、その遺跡が分布する関係諸国間で見解を異にしており、将来に残された大きな課題である。

最後に、中・近世考古学の成果も見落とせない。高麗時代では、多種多様な遺跡・遺物が調査・研究されてきた。そのうち、たとえば国都の故地開城付近では、太祖王建陵や、上述のように霊通寺跡が発掘調査され、古墳壁画や伽藍配置などについて、計り知れない数多くの成果をもたらした。日本における高麗青磁の出土や新安沖海底沈没船の引上げ遺物からも、高麗考古学の重要性を痛感するところである。

朝鮮もしくは李朝時代に関しても、城郭・寺院・墳墓・陶磁器窯などの遺跡が発掘され、豊富な遺物を出土している。とりわけ、たとえば忠清南道瑞山郡の海美邑城や慶尚南道梁山郡の円寂山烽燧台の発掘調査で、それぞれの全貌が明らかにされたことは画期的である。このように、上記の種々の遺跡や各種遺物に対する個別・具体的な調査と研究は行われているが、それらの総合もしくはいっそうの研究の展開もまた、こんご推進しなければならない重要な分野である。